

日中科学技術 No. 48

1985.12.20

発行所
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島 1-7-11
南新ビル6F TEL.(03)815-7241

中日科技交流の前程似锦

(中国科学技术协会主席) 周 培 源

在新中国成立之后，贵国知名的科学家不断应邀访华，开始了中日科技界的友好交往。

先是个别的科学家如茅诚司先生、坂田昌一先生等，以后逐步发展到代表团。1957年夏以朝永振一郎先生、有山兼孝先生为首的日本物理学家代表团来访受到了中国物理学界的热烈欢迎和中国政府的重视，周恩来总理亲切会见了代表团。

1964年以坂田昌一先生为团长、有山兼孝和柘植秀臣先生为副团长的贵国代表团参加了中国科协主办的北京科学讨论会。1966年以野上茂吉郎先生为团长的日本物理学家代表团出席了北京物理学讨论会。特别在两国1972年恢复邦交以来科技交流，同其他领域一样也得到了发展。

1977年日中科技交流协会的建立翻开了中日科技交流的新篇章。贵会成立不久中国科协即应贵会邀请派团访问了贵国。我有幸参加了代表团，愉快地拜见了茅诚司、朝永振一郎和有山兼孝等老朋友，

受到了贵国科技界和人民的热情接待，使我的对贵国的科技和生产的发展有了进一步的了解，加深了两国人民的友谊。我们还同有山先生讨论了今后双方协作的前景。访问期间福田首相在百忙之中接见了代表团，使我们深感荣幸。

近年来，中日两国政府间的关系进一步得到发展，两国民间各方面的交往也有了很大的跃进。再过二年日中科技协会将庆祝成立十周年。我和有山先生的友谊也将达到三十年。回顾过去，瞻望将来，中日两国的科技交流前程似锦。我们希望进一步加强中日科技交流，可以举行双边学术会议或对彼此感兴趣的课题进行合作研究。我们欢迎贵国科技专家对发展国民经济与工农业生产或者对发展我国的科学技术进行咨询。我深信中日人民的友好协作，不仅有利于发展两国的经济，而且会对维护亚洲与世界和平作出巨大的贡献。

衷心祝愿日中科技协会的工作掀起新的高潮。

〔訳文〕 中日科学技術交流の前途は錦に似たり

周 培 源

中日科学技術界の友好往来は、新中国の成立後、貴国の著名な科学者が招待に応じて、相次いで訪中されることで開始されました。

先ず、茅誠司先生や坂田昌一先生のように個人的に科学者が訪中され、その後は次第に代表団に

発展してきました。1957年の夏、朝永振一郎先生有山兼孝先生を始めとする日本の物理学者代表団が来訪され、中国物理学界の心からの歓迎を受け、中国政府もこれを重要視し、周恩来総理が親しく代表団と会見いたしました。

1964年、坂田昌一先生を団長とし有山兼孝先生、柘植秀臣先生を副団長とする貴国の代表団が中国科学技術協会主催の北京科学シンポジウムに参加されました。1966年には、野上茂吉郎先生を団長とする日本の物理学者の代表団が北京物理学シンポジウムに出席されました。特に1972年両国が国交を回復してからは、科学技術交流は他の分野と同様に発展して参りました。

1977年の貴協会の設立は、中日科学技術交流史に新しい一頁を開きました。貴協会成立後まもなく、中国科学技術協会は貴協会の招きに応じて代表団を送り貴国を訪問致しました。私は光栄にも代表団に参加し、茅誠司先生、朝永振一郎先生、有山兼孝先生等の古い友人にお目にかかり、貴国の科学技術界と人民の暖いもてなしを受けました。これにより私達は貴国の科学技術と生産の発展に対して、より一層深い理解を得、両国人民の友好を深めることができました。私達は更に有山先生と今後の双方の協力の見通しについて話し合いました。訪問期間中、福田首相はお忙しい中を代

表団に接見され、私達は非常に光栄に思いました。

近年、中日両国政府間の関係は更に発展を遂げ、両国の民間各方面の交流も飛躍的に進展しています。2年後には、貴協会は成立10周年を迎えられます。私と有山先生の友情も30年になろうとしております。過去を振り返り、将来を望見すれば、中日両国の科学技術交流の前途は輝かしいものです。私達は、中日科学技術交流が更に盛んになり、双方で学会を開催したり、或いは相方が関心を持つ課題について共同研究できるようになることを希望しています。私達は貴国の科学者が国民経済と農工業生産の発展について、或いは我が国の科学技術の発展について諮詢されることを歓迎致します。中日両国人民の友好協力が両国経済の発展に役立つばかりでなく、アジアと世界の平和に対しても大きな貢献をなすであろうことを私は確信しております。

最後に、貴協会の事業が新たな発展を迎えられますことを心から望んでおります。

第10回(昭和60年度臨時)総会開く

この総会は、本年7月の定期総会のあと、諮問委員会の熱心な審議を経た提案事項を中心に審議された。

ここで議決又は承認されたことは、12月5日第25回常任理事会でその措置が審議された。このためこれら2つの重複部分を省いて、その概要を紹介したい。なお会員各位は、臨時総会報告として別途詳細にご報告を差上げてあるので、ここは要旨に止める。

1. 会長報告：昭和60年度事業の中間報告(収支報告は10月末現在)が行われた。その中には既刊会誌掲載のものが多く、進行中のものでは、専門家の交流で訪中3件、訪日1件がある。(全会一致で承認された)
2. 10周年関連事業(議題1)：7月総会のあと、諮問委員会取まとめ試案に関し中国側の意向を非公式に徴した原案が提示された。総会はその

大綱を了承し、さらに12月5日常任理事会が措置を検討した。

- (1) 10周年記念事業：各行事の進め方及び全体構想について準備委員会を設けて審議することを総会は決定した。常任理事会(以下「常理」と略記)は次のように取扱うこととした。
 - ① 講演会：中国側招待講演者による講演会とし、テーマは中国側と連絡して決定する。
 - ② シンポジウム：講演会の翌日から3日間程度とし、テーマは日中双方協議の上決定する。テーマ決定後はそのための実行委員会を設置して、検討する。
 - ③ 当分の間、諮問委員会が中心となって、上記①②の構想について、推進を図る。総会に提案があった「記念式典、記念パーティ」の行事は、上述2行事の見通しを立ててから改めて検討しても遅くはない旨の意見があった。

- ④その他：刊行物その他別途検討する。
- (2) 10周年関連事業：本協会が十周年までの間に積極的に推進を図るもの、当面60年度残期及び61年度事業として推進するものを対象とする。
- ①シンポジウム：候補として検討中のもの数件、中国側と実行に関し具体化の見込が立った段階で会誌・会告その他の方法で適宜周知される。
- ②中国科学学と科技政策研究会との協力…研究連絡委員会を設け窓口とする。協力の内容等…中国側と具体的に協議する。
- ③中国有色金属工業総公司への客員教授の推薦…24の学会誌公告の結果申出のあった方方には、夫々申請様式を送付し、申出に基づき先方に連絡をとりつつ、積極的に協力する。(会告Ⅰ参照)
- ④英中日工業用語辞典(26万語)日本語校閲協力…校閲委員会を設け61年初頭開始。
- ⑤訪中団派遣2件…関係方面との連絡協議を促進し実現に努める。
- ⑥中国科学院への専門家推薦…派遣候補者の推薦は61年4～5月頃までに61年内の予定者を提出すること。
- ⑦その他の交流事業…これまでと同様実施する。
3. 協会規約の改正：(議題2)規約第5「会員の種別及び会費」について、総会の議を経る必要があり、臨時総会は61年度(61.4.1開始)対処のために開かれた次第である。
- この案は、個人会員は正会員(年会費1万円…従来通り)と準会員(年会費5千円)として、若年科学者その他支援者の入会に道を拓き、賛助会員は1口当り会費を10万円に改めたいとするものである。本案の可決により協会事業及び運営の活性化、財政基盤強化を図り、拡充を迫られる諸事業の遂行に当るための規約上の基盤が整えられたといえる。
- 4-1 野上茂吉郎記念交流基金の設定(議題3-1)：去る7月8日逝去された野上茂吉郎常任理事のご遺族からの多額の寄付金について、諮問委員会はその基本構想として標記の名称の基金とし、野上先生の御遺志を末永く継承して、毎年、当初寄附金額を上廻る額を中国人留学生研究助成のため支弁可能なように、一般寄附金を募り基金元本を強化する案を提出し、その設置が承認された。(下欄及び会告Ⅱ参照)
- 4-2 公益法人化(議題3-2)：これまでの協会運

野上茂吉郎記念交流基金 略称「野上基金」の誕生

10月25日野上先生のご遺族から百万円のご入金を戴き、11月5日野上基金構想の臨時総会提案の内定まで、「最も有効に!!」とのご遺族のお気持ちをどう生かすかと、私どもは大変悩みました。

先生はガンでご逝去になり、対ガン協会へのご寄附は理解できます。もう一つの本協会では、いろいろと考えました。1957年以来、野上先生が日中科学技術交流の強化発展に捧げられた跡を顧み、中国の科学技術人材育成……中でも、来日中の中国人留学生(大学院博士課程又は同等以上)の研究助成に…毎年最低この位はどの生前のお話

もありました。そして、2年後(協会十周年)には、この最低額達成を何とか実現致したい。

そのための“核・火だね”として募金そのものを拡充しよう—ご遺志を末永く—と広く募金をお願いすることに決しました。

そこには、日中両国の真の友好を願う日本人の善意と浄財が、中国21世紀の担い手達を支え、その心を通して、友好の熱意が燎原の火となれかしとの願いもこめております。何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

(別紙会告参照)

営の経験に照らし、公益的な運営を保障するには、公益法人として資金協力者に免税特典が得られる必要がある。このため、改めて公益法人

化に努力して協会の長所を伸張拡充できるよう、現役員と常任理事会にその扱いを委任することを総会は承認した。

日中交流ニュース

中国機械工業部科学技術情報研究所 機械工業資料調査訪日団の来日

この訪日団は、上記研究所の李延高総編集長を団長とし、同所の陸振海高級エンジニア、艾国强、王継先エンジニアの4名で構成されている。期間は11月25～2月5日の予定である。主な訪日目的は、所蔵図書充実のための資料収集、中国の経済体制改革に伴う機械工業関係の管理体制改革と同工業振興に役立つ諸資料の調査その他情報と人の交流発展に資する諸問題の検討等で、来日以来12月下旬までの前半の訪問先は以下のとおりである。

(財)機械振興協会の経済研究所、技術研究所、政府刊行物センター、工技院傘下電子技術総合研究所、機械技術研究所、筑波大学図書館、図書館情報大学、中日新聞社、愛知県庁、名古屋港、出光興産愛知製油所、愛知機械工業熱田工場、トヨタ自動車本社及び関連工場、東洋機械金属、(この

間、京都、大阪、神戸、奈良の市内見学あり)日本機械学会、日本機械工業連合会、日本能率協会、経済団体連合会、東京都立工業技術センター、日本自動車工業会、日本科学技術情報センター、東洋経済進報社、国立国会図書館である。

歳末と年始を含む期間は前半視察調査事項の整理と休養に充てる予定となっている。

天津市計量管理局訪日団の来日

天津市計量管理局の載旭瀛副局長を団長とし、同局の宛吉春総エンジニア、朱宗武計量検定所実験室副主任、徐慧明天津市対外科技交流中心エンジニア、楊学礼国家計量局エンジニアの5名で構成される訪日団が来日した。(12月12日～24日滞在)。訪問先は、工業技術院電子技術総合研、同院計量研究所、東京都計量検定所、日本計量器連合会、大阪府計量検定所、島津製作所三条工場、石田衡器製作所、京都市計量検査所、機械振興協会技術研究所、共和電業である。訪日目的は、わが国の計量機器の質量、定型試験に関する施設機器の現況視察及び関係機関、専門家と今後の交流を円滑にする等である。

極低温物理訪中報告

有山会長のご斡旋、中国科学院の招請により、1985年10月30日より11月8日までの10日間、中国を訪問した。私にとって2回目の訪中である。前回は1983年10月、中国科学院・日本応用物理学会共催の「ジョセフソン効果の物理と応用」日中シンポジウム出席のため、北京に1週間滞在した。この日中シンポジウムの第2回が、「超伝導材料」をテーマとして1986年5月に仙台で開催の予定である。したがって、凶らずも、今回の私の訪日は超伝導材料に関する日本の基礎研究の現

(東海大学理学部教授) 中嶋 貞雄
(日本学術会議会員)

状をあらかじめ中国の関係研究者に紹介するという役目を果たすことができた。現在(1984年4月～1987年3月)文部省科学研究費特定研究「新超伝導物質」が進行中であり、私が研究代表者としてそのとりまとめ役を務めているからである。

さて、今回も前回と同様に短期間であったが(これは私の個人的都合による)、その間に中国科学院物理研究所(北京)、同低温工学研究所(北京)、中国科学技術大学(合肥)、中国科学院上海冶金研究所を訪問し、研究施設の視察、超伝導研究者と

の討論を行なうことができた。北京と合肥では、上記特定研究「新超伝導物質」の目的、現況につき、約2時間にわたって英語で講演した。とくに北京では若い研究者が鋭い反応を示し、講演に使用したOHPまで複写された。

以下は各地で得た印象の要約である。

中国科学院物理研究所

ここは前回の日中セミナーの世話役だったので数名の知己がおり、空港の送迎もふくめて北京滞在中の私の面倒を見てくれた。ただし、中国低温物理学界の中心人物であり、この研究所の所長であった管博士は、中国科学技術大学学長となって合肥に移り、代わって米国帰りの若い量子光学研究者である楊博士が所長になっていた。また、研究所の低温部門主任であった洪博士は新設の低温工学研究所の所長となり、物理研究所の低温技術者を引きつれてそちらに移っていた。このように研究組織の再編成が比較的スムーズに行われるところが、科学アカデミー・システムの長所なのであろう。

さて、楊所長の説明によると、現在この研究所は部門制を採らず、58の小グループが研究単位になっている由である。その40%が基礎研究、60%が応用研究であり、研究分野は日本式に言えば物性物理が主流ということになる。経常研究費は、日本円に換算して年約8億とのことで、これは中国としては相当な高額である。実験設備は、3年前に視察したときと比較して格段に進歩したとは見えないが、研究者については、若い人が育ってきたこと、そして彼らが新しい問題に積極的に取りくもうとしていることを感じた。具体例を二、三あげておこう。

○表面物性研究装置としてESCA, FIM, MEB等があるが、このうちMEBは、東大堂山教授の門下生である周博士の手作りである(もっとも、彼は40代で、若いとはいえないかもしれぬ)周氏は1次元人工格子(quantum well)の研究に意欲をもやしていた。

○共通X線室では60keVのEXAFSでアモルフ

ァス系の構造研究をやっていたが、その日本帰りの一研究者は、私が物性研究所長であったことを知ってか知らないでか、“東大物性研でEXAFSをやらせてもらったことがあります、あれはS/Nが悪くてためでした”という感想を聞かせてくれた。

○本年5月米国Iowa大学で「超伝導材料とメカニズム」国際会議があり、そこで東北生れの若い陶博士と会ったが、彼もこの物理研究所に帰っていて、再会することができた。日立中央研究所で開発に成功した超伝導トランジスターの話に大きな関心を示していた。

○この研究所には約140人の大学院学生がいる。その1人がVN₂薄膜の超伝導転移の実験をやっている、結果の解釈について話合ったが、相当な研究者に育つのではないかという印象を受けた。

なお、北京での週末の夜、副所長の林博士と低温工学研究所長洪博士が夕食会(北京鴨)を開いてくれた。前記の周博士、陶博士のほか、超流動ヘリウムの超音波実験をやっている邵博士、研究所の外事担当者である白女史が加わり、知的でしかも洗練された会話をたのしむことができた。私が物性研究所長であった頃、管所長との間で物理研究所と物性研の交流協定の話がおこったのだが、はかばかしい進展を見ないうちに私が停年を迎えてしまい、話は中絶してしまった。夕食会でもそのことが遺憾な思い出として語られ、今後の交流に期待して乾杯が交わされた。

中国科学院低温工学研究所

前述の通り、洪博士を所長、物理研究所の低温技術者を核として新設されたもので、北京周辺への液化ヘリウムの供給のほか、金属デュワー、小型磁気冷凍機、その他低温工学の技術開発を行っている。このほか、北京近郊の原子炉に冷中性子線源が新設されるということで、そのための液化水素システムが開発されていた。ヘリウム液化機自体もふくめて、すべてホーム・メイドである。何でも既製品を買う日本の風潮とは正反対だと私が感想を述べると、洪所長は“その方が能率

が良いではないか”と答えた。そして、“こちらに来てからは技術開発ばかりで物理がないのです”とつけ加えた。しかし、その一方では、この研究所で開発された小型タービンの構造や機能を、誇りと情熱をこめて説明してくれた。

北京大学物理学教室

低温、とくに超伝導関係のみを視察した。これまで毎時8リットルのヘリウム液化機であったのが、毎時20リットルのマシン(中国製)になることである。また、7テスラーのNbTi 超伝導マグネットもホーム・メイドの由であった。

ここでも超伝導薄膜の研究が盛んである。古いCVD装置で高品位の Nb_3Sn のジョセフソン接合が作られていた。例のココムの規制が生きていて、市販のSQUIDを輸入できないのだそうである。

新しいところでは、Nb-Si系、Nb-Ce系の多層膜が研究されていた。ここでは、昨年購入されたばかりのBalzerの製品が活躍していた。

北京大学といえば中国のエリート校であるが、それでも大学院学生の不足を歎いていた。

中国科学技術大学

ここは東大工学部との交流協定もあり、現に私が行った時点でも数名の日本人研究者が講演や共同研究のために滞在しておられた。

生憎のこと管学長は行きがちに北京へ出張で会うことができなかった。方副主任、阮教授、曹教授の3人が夕食に招いてくれて、北京と同様にここでも知的で洗練された会話を愉しむことができた。

合肥で一番強い印象を受けたのは、“構造解析センター”である。1982年から2年ばかりで新設されたもので、3階建の独立したビルの中に走査電顕、回転X線回折計、FT-NMR、FT-IR分光計等々、約15種類の共通測定器が備えられている。いずれも、日、英、米からの輸入品で、400万ドル程度の購入費は世界銀行からの融資でまかなったということである。

日本式にいうと、このセンターは共同利用施設

であり、中国各地から送られてくるサンプルの特性測定を行なっている。人員は60名で、うち5名が教授クラスで、大学院学生も15名程度の由である。

私が特に強い印象を受けたのは、物性研究長時代に、物性研の共通測定室の強化・近代化を企画しながら、実現に至らなかった経験があるからである。今後の物性研究の発展の原動力となるのは新物質の開発とこれによる新物性の発見であることはまちがいない、それには人工格子をふくむ物質開発と開発された物質の特性測定を系統的に行なう必要がある。物質開発はさまざまな研究室でそれぞれの独創性を発揮する必要があるが、構造解析や特性測定は、相当部分を共同利用施設でやるのが賢明であろう。

なお、合肥では中国科学院プラズマ研究所も見せてもらった。強磁場研究施設を併設しようとしているのが、当然のこととはいえ、面白かった。

中国科学院冶金研究所

科学院側の連絡に多少のミスがあったらしく、合肥の滞在が上海側の予想より1日長くなってしまい、合肥から上海へは夜行列車を利用させられた。朝6時に上海駅に到着、ホテルで朝食をとると、8時半には冶金研究所へむかうというあわただしさであった。しかも、付添人がないために自動車の運転手が私をセラミック研究所(同一敷地内だが)に連れて行き、しかもそこが年一度の公開日で混乱しているというハプニングがあり、率直にいうと上海の印象はあまり良好でなく、希薄である。

冶金研究所では、超伝導線材の研究者である胡博士が、研究の現状を紹介し、施設を案内してくれた。ここでも、中国独力で線材技術を開発してきたことが印象的であった。しかし、単なる技術開発におわらず、線材のミクロな構造と臨界電流密度の関連を知ろうと努力していることにも感心した。

短期間で、しかも限られた私の専門分野の交流

であるが、洪博士の言葉を借りるなら、“ゆっくりとはあるが”着実に中国の研究は進展しつつあるというのが私の印象である。後発の強味で、日本に追いつき、追いこしているケースもあろう。

人材の面で文革の影響が深刻なようだが、これも若い研究者が急速に育ちつつあるようにおもわれる。こういう若い人たちを今後の日中交流で重視してゆくことが必要であろう。

“素粒子原子核物理” 中国訪問の報告

東京大学原子核研究所 山口 嘉 夫

1985年11月21日から12月1日まで、北京・合肥・上海を訪問し、中国科学院の研究研や大学を視察し講演や討論を行った。中国滞在中の諸経費は総て中国科学院の負担で、そのhospitalityに心からの謝意を表す。中国の物理学者は日本との学会交流に深い関心を有しており、今後の交流発展に、より一層尽したいと考える。尚、今回の訪中には妻が同行した。

以下、訪問の概略を日付順に記す。

11月21日成田空港10 a.m. 発、北京直行のJL781便で、北京2時半着。中国科学院理論物理研の戴元本教授(粒子物理)と周玫さん(専任招待係)の出迎えを受けた。直ちに北京友誼賓館に赴く。戴教授や同院外事局の崔・張氏と今後の日程を打合せた。

11月22日(金) 午前、同院・理論物理研究所を訪問。周光召所長は多忙で不在のため、郝柏林副所長(物性理論・統計物理)、戴元本教授等に迎えられ、同研究所の現状説明を受け、日中学术交流について懇談した。(特に、この研究所の物性理論・統計力学関係のスタッフが中国側の中心となっており、1986年に上海で開催予定の当該分野の日中合同workshop(日本側代表は久保教授(慶応大)、鈴木教授〔東大理〕、日本より約10名出席予定)の準備状況を聴取した。尚、このworkshopへ日本の物理学者を派遣することに関し、日中科学技術交流協会の援助を関係者がお願いしている。)

同所の報告庁で gravity and particle physics と題し、大学院学生を含む20名位の中国の理論物理学者に、約1時間半、講演を行った。講演後、本研究所を視察した。研究所は敷地・

建物共に頗る手狭で、研究者の個室が殆どなく、若い研究者等が図書室又は自宅で理論的研究を遂行している現状に驚いた。郝副所長の旧オフィスは、冷暖房を具えた(他所にある大型電算機の)端末設置室となっており、大型理論計算や(他事業所委託の)ソフト・ウェアの開発・製作(例:ある事業所の仕事のシステム化と作業管理方式)を行っていた。そしてオフィスの一部は隣接の生物関係研究所に間借りしている。更に狭い敷地内に2階建の新研究棟を建設中で、練瓦を積んでの基礎工事に多くの人が働いていた。

同研究所の名誉所長・彭桓武教授(理論物理)の古稀を祝って編集された、同教授論文選集を贈られた。

22日中食は、高能物理研究所の葉銘漢所長の招待で、鴻賓楼で接待を受けた。同席者は、朱洪元・楊雲・張宗輝・黃涛・吳丹迪(順不同)であった。

同日午後、中国科学院・高能物理研究所を訪れ、葉所長、朱教授等の出迎えを受け、研究本館2階応接室で暫時歓談し、来訪者芳名録に記帳した。(午前からここまで妻と同行)その後、妻は高能物理研究所の技官・楊雲さん(日本の高エネ研客員教授として滞在中の鄭志鵬教授夫人で数ヶ月来日)の案内でラマ寺院・雍和宮の見物に出かけた。

次に、数十人の所員の来聴の下、Development and Present Status of High Energy Physics in Japan (including TRISTAN)の題目で1時間半程の学術講演を行った。後で多くの質問が寄せられ、日本の斯学の現状及び日本の学術体制・研究費の状況について関心が大きいことがうかがえた。

その後、研究所内を見学し、特に^{ベアス}BEP C(ビーム・エネルギー 2.2~2.9 GeVの電子・陽電子衝突器)の建設状況(加速器・衝突器・測定装置等の準備状況やBEP Cを設置するための建物の建設工場の現場)を念入りに視察し、案内役の葉所長や関係者に相当に立入った質問をした。また35 MeVの陽子ライナック(当初は50 MeVの陽子シンクロトン建設を計画しその後それを取り止め、BEP C建設に変更したが、これに先行して完成させたもの)も視察した。これは原子核の研究その他に利用されていた。

所内視察後、本館正面入口に両側のカラー写真のパネルを見たが、これは1年前、鄧小平副首席を迎えてBEP C建設の起工式(同氏が鍬入れをしている写真もあった)の様態を示すものであった。そして葉所長等と高エネルギー物理学や、ICFA或は今後の日中学术交流等について意見交換を行った。特に印象深かったのは、葉所長がBEP CとTRISTANの完成後に日中両国が共同して東アジアに国際的な研究所(CERNのアジア版)を創設しようと提言され、筆者が賛同の意を表明し、今後とも両国の学术交流を発展・拡大させるべく努力することで合意したことであった。

夜、中国科学院副院長・周光召教授の招待により北京の和平門烤鴨店での晩餐会があった。理論物理研の郝副所長・戴教授・周攻さん、中国科学院外事局の崔張両氏も同席した。

11月23日(土) 午前中は妻と共に、張氏の案内で、北京大学と清華大学とを訪問した。

北京大学では、陳佳 副校長(粒子加速器)に迎えられて同大学の客館の応接間において、胡寧教授(理論物理、故坂田昌一教授と親交があり学問上においても強い影響をうけたと云われた)、楊教授(原子核理論、IBMの研究をしており、〔東大理〕有馬朗人教授と交流がある)、宋副教授(粒子物理、SUNYに留学したことがあり英語に堪能)、秦副教授と共に歓談した。陳副校長は東大核研をはじめ日本の加速器の専門家に知己が多く、同副校長より、北京大学の解説書(英文)や大学

のバッジを贈られ、大学の歴史や物理系、理論物理学の研究の状況・大学院のあり方など詳しく説明を伺った。

その後、北京大学の物理楼を見学し、特に原子核等近代物理関係の学部(といっても修士レベルを含めた5年制の大学)学生用機器が多数揃っている実験室を視察した。全く近代的で、東大の学生実験用設備に比べてそう遜色がなく、実験指導専門の教官(女性が多かった)が十分いる点では、日本の大学は遙かに及ばない。

次いで、清華大学を訪れ、大学本部の大きな建物の正面玄関で、劉物理系副主任と鄭理論物理教研組主任に迎えられた。入口を入った一階大広間に、清華大学の各系の教育・研究内容を紹介する一連のパネルが置いてあり、大きなカラー写真をふんだんに使い一般人にも解るように平易な解説がついていた。中学・高校生の大群が熱心にこのパネルを見ていた。また大学の建物配置の模型も用意してある。ここを一廻りすれば大学の概況が判るようになっているのには感心した。パネルを一循した後、二階の応接間で、劉・鄭両氏と懇談した。劉教授から清華大学の解説書(日本文)、バッジ、絵葉書を贈られ、同大学の歴史や現状の説明を受け、当方からは東京大学の状況について述べた。両氏は東京大学に大層関心があり、東大の学内広報を清華大学・副校長あてに定期的送付の依頼を受けた(帰国後そのように取計った)。

次に清華大学の加速関係の研究施設を見学した。関係学者に東大核研を訪問した人や長期滞在者が多いので、特に希望しての視察であり、顔見知りの何人かに久闊を叙した。そこで電子ライナックや陽子加速器(核実験のみならず、他の分野の研究機関や企業体の需要に応じて人工放射性物質の生産にも利用している)、それらからのビームを使う実験装置等を視察した。ここにも中学乃至高校生の一大集団が見学に来ていて、大層賑っていた。更に、この加速器グループは、医療用や材料試験用に4~5 MeVの電子ライナックを製作し供与しており、又近い将来軽イオンのクーラー・リン

グを東大核研に倣って製作したいとしており、放射光実験施設建設計画（その作成に核研や高エネ研が大きな寄与をしており、殊に核研には清華大学の4名の研究者が1〜数ヶ月その計画を準備する為滞在した）を提案する等、このグループの意気は高く研究に活気があるのを頼もしく感じた。今後とも交流を継続・拡大したいと思う。

車で清華大学のキャンパスを一循環し、かつて楊振寧教授（SUNY, 理論物理, ノーベル賞受賞者）の学んだという建物や構内で修理中の庭園等を見物した。

中食は清華大学の教官餐厅で、張孝文副校長、劉乃泉物理系副主任、何文良加速器教研組主任、鄭宇平理論物理教研組主任、林郁正氏、及び張氏と共にした。清華大学の招待である。

23日午後我々夫婦で劉女史（戦時中北京の生活学校で学び、東京の自由学園に留学経験があるという）の案内で故宮を見学した。

11月24日（日）我々夫婦と（中国科学院招聘で同じ賓館に宿泊中の）W. A. Bardeen（Fermilab, 米, 粒子物理）博士夫妻とは、夫々周玫さんと大学院学生の付き添いで2台のタクシーに分乗して、明陵と長城（八達嶺）の見物に行く。明十三陵のうち長陵の建物と定陵の地下宮殿等を見、中食は定陵前の定陵餐厅でとり、八達嶺へ行った。

夕食後、二人の大学院学生^{*}（粒子物理理論専攻、理論物理研究所所属）の案内で、W. A. Bardeen 夫妻と共に国際倶楽部で民族音楽を聴いた。

^{*}その中の一人は、アメリカのミネソタ大学の大学院に留学して帰国してきた李君で、ミネソタ大学の須蒲寛教授（筆者の東大でのクラスメート）は彼の学位論文の審査員の一人であった。

11月25日（月）今日から7日間、中国全国から粒子物理の理論家約150名が北京に集り Superstring のworkshop を開催すると云う。出席者が予想以上に多かったので、最早workshopとはならず実質はむしろ過密なlecturesのシリーズということになるかと聞いた。このworkshop

の巻頭に、W. A. Bardeen博士が「Gauge Anomalies, Gravitation Anomalies, and Superstrings」という題目で物理研究所において講演するので、それを聞き且つworkshopの様子を見ることとした。9時40分から始まったBardeenの話は要領よく判り易い総合講演だったが、11時に終わった後、はかばかしい討論がないまま、聴衆は瞬時にして居なくなった。

午後は、天壇公園と景山公園を観た。妻は一日中、観光と買物でBardeen夫人と同行した。

11月26日（火）午前中に、妻と共に頤和園と景山公園へ行き、午後は休息と荷造りに費した。

夕方4時半、周珠さんに付添われて北京站へ行き、外人用の待合室で休む。

18時30分、定刻に発車した127列車（北京発合肥行）の軟臥車（4人乗りのコンパートメント）で合肥に向う。発車少し前、劉女史の見送りを受ける。

11月27日（水）火車は予定よりやや遅れて12時54分に合肥站到着いた。ホームには中国科学技術大学の朱棟培副教授と翁惠民講師（共に近代物理系）が出迎えに見え、タクシーで大学へ案内されて、大学キャンパス内の專家楼に入る。部屋には、スタディ、ベッドルーム2、台所、食堂、冷蔵庫つき、バス・トイレ付、スタディには日本製のテレビがあった。

宿舎で朱博士から科技大の状況を聴き、同博士の案内で大学のキャンパス内を見学した。近代物理系の建物では、そこの核物理組の葉雲秀博士から β スペクトロメーター（調整中）とこれを用い³Hの β 線のエネルギー・スペクトルの終端附近の精密測定によりニュートリノの質量を測ろうとする実験計画について説明を受けた。私共の核研でも同じ研究計画を遂行中であり、今後の情報交換を約した。更に図書館内を見学し、プラズマ研究棟内に間借りしている理論物理中心の図書室等を訪れ、朱博士と別れた。

16時半ごろ專家楼へ、鄭文秀副教務長が訪ねて来られた。同氏は1945年京大工建築科を卒業

された方で、1984年4月中国科学院同步輻射加速器建築考察団(9名)の団長として来日され、東大核研に来訪されたことがある。同氏から科技大の様子や日中交流の事などをうかがった。

科技大の方励之副校長(宇宙物理、京大基研に2ヶ月位滞在し、その時基研の佐藤文隆教授と共著で作った宇宙のトポロジーに関する論文により、両者は重力エッセイ賞を受賞した)の招待で專家樓の餐厅で夕食会。阮図南(理論物理中心長、近代物理系主任)、朱棟培副教授等も出席された。

方副校長から科技大のパンフレット(絵葉書と合肥の地図、大学のあらまし)、バッジ、茶碗を贈られた。食事は中国式でなく銘々皿で料理が出て大層おいしかった。食事中、日中交流や日本訪問時のことなど様々の話題を交した。

11月28日(木) 鄭文秀氏等の案内で放射光施設のオフィスに行き、計画の責任者・何多慧主任から全般的な説明を聞き、その後放射光施設の各成分の準備作業を視察した。中国の加速器三大計画の一つ(残りの二つは北京・高能物理研究所のBEP Cと蘭州の重イオン加速器)として key projects に入っている丈に、張り切って準備を進めている事が見てとれた。

次いで、結構成分分析中心を見学した。三階建ての新しい建物内に20台近くの種類の新鋭分析機器が夫々 clean room に収容してあった。これらは極く最近外国から輸入したもので総計350万米ドルを要したという。大部分は日本(日立、NEC、島津製が主だった)からの輸入であるが、イギリス、アメリカ、オランダ、西ドイツより買入れたものもある。日本製品はコンパクトで使い易いし、アフターケアがよいとの事で好評のようであった。大学卒の若い人たちが何人かずつ、夫々の機器を担当しているが、まだ十分に使いこなすには至らないように見受けられた。またこれらの機器は外部よりの試料の分析の依頼にも応じているという。〔電子顕微鏡(二種類)、X線や紫外から赤外までの数種類の分光器、ラマン・分光器、万能テスト・マシン、ESRやNMRの装置

など色々な資料(新材料・生物資料を含む)の構造や成分を分析する新鋭装置が揃っていた。〕

最後に科技大の新サイトに建設中(1984-88年で完成予定)の放射光施設(800 MeVの storage ring を中心とする)^{*)}の為に工事現場を訪れ鄭教授から説明を受けた。

*) 当初の計画では400 MeVのものとなっていたのを変更し800 MeVの蓄積リングとした。

中食を專家樓でとり、マイクロバスで合肥空港に赴きCA 5016便で上海に向う。飛行機は約1時間遅れて合肥に到着、上海へも遅れて15時50分頃着いた。

上海空港には、中国科学院・上海分院・外事弁公室の開建偉氏と長男の幸夫が出迎えてくれた。車で上海での宿泊・中国科学院上海分室・專家招待所に向う。開氏と上海での日程について打合せ、手配を依頼した。夜は中心街に出て親子3人で夕食を共にした。上海では原子核研究所を訪問し、長男の指導教官(同済大学)を表敬訪問するほかは観光にあてる予定とした。

11月29日(金) 午前中、開氏の案内で上海博物館を見学に行く。

午後は、開氏の案内で上海の郊外にある上海原子核研究所を訪れ、劉根宝・原子核実験部主任等の出迎えをうけ、同研究所の概要を聞き、筆者からは東大核研や高エネルギー物理学研究所の状況を説明した。同研究所のパンフレットをもらい、又原子核関係の研究者交流について強い要望を受け、今後その実現にむけての努力を約した。^{*)}

*) これらの点は費用の支出がからむので、正確を期すため、開氏に通訳していただいた。これを除けば、講演や会談は英語で行った。

所内のSFサイクロトロンや12 MV タンデム収容用の建設中の建物や、原子核研究等の実験装置を視察した。(程曉元所長は北京に出張中で話を伺えなかった。)

11月30日(土) 午前、長男(建築系大学院学生)の留学している同済大学に、開氏の案内で行

く。留学生会館で同济大学外事処の陳奕達講師等、長男が日頃世話になっている人々に挨拶した。そして留学生会館で長男の友人等〔ネパール(2人)、イラク(1人)、オーストラリア(1人)からの留学生及び日本から来ている九大、大阪市大の助教授各1名〕と共に、留学生用食堂でその料理人に造ってもらった特別メニューの中食をとる。

午後、長男の部屋で、指導教官の王紹周教授に会い日頃のお礼を述べ今後の叱責をお願いした。

その後バスで上海の中心部へ行き繁華街を見物した。

12月1日(日) 開さんと長男に送られて上海空港へ行き、11時15分上海発東京・シアトル経由ミネアポリス行きのNW 088便に乗る。約1時間近く遅れの出発で、成田空港に午後3時すぎ帰着した。

最近の中国科学技術

〔配列：事項見出、(中国通信掲載月日、一掲載頁、発信地、発信月日)の順〕

- ① a 中国の第1回・特許認可、年内に50~60件。
b 中国科学院特許事務所(9カ所)開業(8.20-2, a大連8.16, b北京8.16)
- ② 黄土高原の土壌流失を牧草作付で阻止(8.27-19~20, フフホト8.25)
- ③ 中国の大学で教官契約制実施へ(9.3-13~14, 北京8.31)
- ④ 中国貿易省、「技術導入契約認可規則」を公布10月から施行(9.27-9~10, 北京9.8)
- ⑤ 西部崑崙地区の地質調査(6年間)で成果(10.4-13, ウルムチ9.21)
- ⑥ 西北5省・自治区の道路網整備総延長12.5万キロ(10.7-6~7, 西安10.3)
- ⑦ 中国最長の長東(長垣-東明)黄河大橋工事完成(10.7-8~9, 済南9.21)
- ⑧ 天津に中国初の地熱研究センター着工(10.18-10~11, 天津10.15)
- ⑨ 内蒙古で風力資源を開発利用(10.21-12, フフホト10.11)
- ⑩ 中国、資源探査衛星を回収、衛星打上げの請負引受を発表(10.29-6~7, 北京10.26:10.30-11~13, 北京10.26)
(関連)中国第3世界への宇宙技術輸出めざす(11.14-11~15, 解説)
- ⑪ 中国、人工衛星レーザー測距儀の開発成功(10.29-7~8, 武漢10.26)
- ⑫ 2000年の中国の姿(経済力は世界5,6位)予測(10.29-9~10, 北京10.26)
- ⑬ 実験動物飼育急速に発展、北京・天津・上海に研究基地建設へ(10.29-15~16, 北京10.24)
- ⑭ 中国で極限の真空度、世界最高の 3.3×10^{-13} トル達成(11.12-20, 蘭州11.1)
- ⑮ 中国で高性能光ファイバー開発に成功(11.14-10, 武漢11.3)
- ⑯ 数学、天文学は世界をリード、2000年の中国の科学技術(11.14-16, 北京11.11)
- ⑰ 2000年の中国の天然資源を予測(11.15-7~8, 北京11.13)
- ⑱ 中国の天文台、合同観測でハレー彗星の画像資料100枚近く入手(11.18-14~15, 昆明11.10)
- ⑲ 中国に全国的なりハビロ網(11.15-9, 上海11.8)
- ⑳ 中国、中等職業教育の振興を重視(11.18-15~16, 北京11.5)
- ㉑ 中国初の計量大学設立(11.18-18, 杭州11.4)
- ㉒ レーザーでウラン同位体分離に成功(11.22-12, 北京11.18)
- ㉓ 西安で新しい膀胱結石爆破治療法開発(11.25-9~10, 西安11.21)
- ㉔ 種もみを使わない稲作法開発(11.25-11~12, 南京11.21)
- ㉕ ヤグ・色素・ラマン・レーザーシステム開発(11.29-14, 北京11.27)
- ㉖ 国家レベルの品質監視検査試験センター網整備へ(12.29-14, 北京11.27)
- ㉗ 中国の制御核融合研究、大きく進展(12.3-13~14, 成都11.20)

- ㉔中国初の低温核熱供給原型炉着工, 世界には2基のみ(12.3-14~15, 北京11.28)
- ㉕中国初の超高速ローター実験室完成(12.3-15, 上海11.26)
- ㉖次の目標は宇宙ステーション建設(12.3-15~17, 北京11.20)
- ㉗中国初の数学ソフトウェア・ライブラリーが完成(12.3-17~18, 北京11.30)
- ㉘'79年以來の農業資源調査・区画作業が大きな成果(12.4-8~9, 北京12.1)
- ㉙1987年までに海洋気象観測網を整備(12.6-14, 北京11.29)
- ㉚リモート・センシング技術を広く応用, 中国西北地区の地質調査(12.11-6~7, 西寧12.9)
- ㉛南水北送は実行可能, 科学院の専門家指摘(12.13-9~10, 北京12.4)
- ㉜中国のエンジニアリング会社(中通公司)輸出を積極的に推進(12.13-11, 北京11.28)
- ㉝“経済最先進国に追いつくのは21世紀50年代”胡総書記(12.10-3~6, 北京12.7)
- ㉞中国で古大陸の地溝帯見つかる(12.18-10, 北京12.15)
- ㉟上海で肝ガン細胞を識別するモノクローン抗体できる(12.18-10~11, 上海12.15)

第29回常任理事会の報告

昭和60年12月5日12時~16時, めっき会館(湯島)第3会議室で開かれた。出席者は, (会長)有山兼孝, (常任理事)鹿取一男, 窪田雅男, 橋口隆吉, (理事)藤田良雄, (事務局長)肥後孝ほか委任状提出19名。

1. 報告

(1)和達清夫会員文化勲章受賞のお祝いとして北京有色金属研究総院に製作依頼のチタン製板画(席上披露)を役員一同から贈呈する旨報告。

(2)援助事業審査委員会: ①陳玉谷中国科学院成都生物研環境微生物主任来日(工業廃水処理, 9月23日~10月2日) ②中国機械工業部技術情報研究所機械工業資料調査訪日団来日(11月25~61年2月5日)(3頁参照) ③天津市計量管理局訪日団来日(12月12日~24日)(4頁参照) ④熊大蘭紫金山天文台助教, 国際会議出席の後研究滞在の費用援助(61.3月1~31日)を承認した。

(3)その他, 数件の取扱事項の報告を聴取, 今後の留意事項について意見交換を行った。

2. 審議

(1)10周年記念事業: 臨時総会で準備委員会の業務処理事項とされた記念事業の進め方について, 各行事ごとにその取扱を協議した。そして中国側

と初期的な協議を行う段階は諮問委員会が当分の間これの整理に当る方針を決定し, 各記念行事(講演会, シンポジウムその他)ごとの取扱方針については臨時総会記事(2頁)に簡記したので省略する。(以下「臨総」として項目を示す。)

(2)10周年関連事業: 本年度残期以降61年度事業につき当面重点を置く。これらの実績に基づいて62年度以降を展望する方針とする。審議事項及びその概要は臨総2を参照。

(3)協会規約の改正, 臨総3参照。

(4)野上茂吉郎記念交流基金の扱い。臨総4及び13頁参照。具体的には協会会員は全会員が募金協力で率先して拠出方願いする。しかし, 賛助会員特に複数口数の会員には年会費程度などお願ひしにくい, またこの基金は, 多くの個人のご芳志を集積する形が望ましいなどの意見が出された。

(5)公益法人化: (臨総4-2参照) 諮問委員会で今後の進め方など, 各方面の意見を聴取しつつ検討を行うこととする。

中国寸描

中国体育の基盤づくりを垣間見て

事務局長 肥 後 孝

10月6日(日)午前中万里の長城を、午後に入り明の定陵を見学して宿舎に戻る。何気なくテレビのスイッチを入れると、「我国を世界の体育強国にするために奮闘しよう」と読みとれる文字が目に入った。上衣を脱ぐ手を休め、疲れも忘れて画面に吸い込まれる。全国青少年体育の大会らしい。広大なスタンドに満杯の人はそのまま巨大なスクリーンとなり、色鮮やかな映像・人文字が音楽につれてフィールド演技の間合いをつなぐ。

フィールドの方は、幼児の体操から始まった。正面中央スタンドから子供達の隊列がスルスルと伸び、数十人単位の輪が次々に形成されていく。ピチピチとかわいゝ演技がリズムに乗って、フィールド一杯に多彩に展開される。よくもここまでにと全国幼児の訓練・錬成の見事さに驚かされる。それが終るとスタンドの華麗な映像が現われる。こうして、小学低学年、高学年、中学、青年へと年齢階層別に整然と躍動する素晴らしい演技が相次いでくり広げられる。

初めから終わりまで見続けて、終ると改めて、個体の発育段階とその筋肉の機能の伸張度を測りつつ、体操が組立てられており、音楽のリズムが、個体と集団の演技の齊々統一に偉大な役割を果し

ていることに気付いた。

オリンピックでの中国選手の活躍の基盤は、このような肉体適応能力の組織的研究と無関係ではない!! また音楽のリズムに合せた一糸乱れぬ何百人の動き、年齢相応の錬成を全国的に展開しつつある中国体育の底辺の広さ、息つくひまもない変化の早さ、つま先から手の指先までピッタリとリズムに乗せて! フィールドからスタンドにカメラが廻ると、巨大なスクリーンはここでも全員が共演者として壮大な絵巻を現出する。

日本では考えられない演出の壮大さ、この巨大な絵巻物は、音楽と図案設計をセットにコンピューターを駆使したとしか思われぬ。しかもその背景には、年齢層別からからだの各部の成長に合せ音楽とセットさせた編成技術がうかがえる。正に、社会主義中国ならではの思いは強い。

中国でオリンピックが開催される時、こうした体育基盤で培われた巨大な群像の中から、次々と金メダルを手にする人々が生れるのは当然と思う。21世紀を待たずに、世界体育強国、最先端に躍り出るであろう中国の底力をまざまざと見出す。

〔資料〕 留学生、研修員等の相互派遣拡大に関する提案

日中両国の留学生、研修員等の相互派遣は両国国民、特に両国青年の相互理解及び相互信頼を増進するものであり、21世紀において両国の友好関係を一層発展させるために、重要な現実的、長期的意義を有している。今日まで、この分野の交流はすでに一応の成果を挙げているが、両国関係発展の現状に鑑れば、なお拡充の余地がある。

このため、日中友好21世紀委員会は両国政府に対し、両国の政府及び民間が、この友好交流事業に関心をもち、この事業を重視し、広く両国の有無の人材養成のため、各種のルート強化・拡大に努力し、留学生、研修員等の相互派遣事業が新しい発展をとげるよう呼びかけることを提案する。

日中友好二十一世紀委員会第二回会議
1985年10月 北京において

本号記事索引(頁) 中日科学技術交流の前途は錦に似たり・周培源(1) 第10回(昭和60年度臨時)総会開く(2) 日中交流ニュース:中国機械工業部科学技術情報研究所機械工業資料調査訪日団の来日(4) 天津市計量管理局訪日団の来日(4) 極低温物理訪中報告(4) “素粒子原子核物理”中国訪問の報告(7) 最近の中国科学技術(11) 第29回常任理事会の報告(12) 中国寸描、中国体育の基礎づくりを垣間見て(13) 資料:留学生、研修員等の相互派遣の拡大に関する提案(13) 会告:Ⅰ中国有色金属工業総公司所属大学の論文博士育成に当る客員教授応募者募集(14) Ⅱ本邦留学中の中国人研究者の研究助成のための「野上基金」設定にご支援のお願い(14) Ⅲ日中科学技術交流の新段階を迎えて…ご意見をどうぞ…(14) Ⅳ協会規約改正に伴う運営活性化にご協力を(14)

◇ 会 告 ◇

I 中国有色金属工業総公司所属大学の論文博士育成に当る客員教授応募者募集

1 要綱：同総公司所属重点大学4学院において、非鉄金属（半導体，稀有金属を含む）専門の工科学系大学の講師，助教等を対象に，博士論文作成研究の指導（1対1又は2～3人グループ）に当る客員教授の推薦方依頼を受けています。本誌47号別紙会告にその専門区分，中国側受入体制など掲載しましたが，その要旨を以下に再掲致します。

2 客員教授の勤務条件等：①給料は月額最高3千元（各人と協議し契約）②連続勤務は1，2～4月で年数回，③宿舎はゲストハウス（夫人同伴可）④客員教授は，a 被指導者提出の博士論文の審査委員となる。b 現役，停年後を問わず，教授経験をもつ70才以下の健康者。

3 候補者の事前短期訪中：候補者は，就任後の指導及び生活問題，契約事項の事前協議を兼ね，専門講演（学術交流）のため短期訪中招待を受けうる。この場合の国際旅費は自己負担です。

4 応募希望申出等：①応募希望申出のメ切期限はありませんが，応募申請書に就任可能の時期（年月）をお示しあれば，先方受入の計画に役立つでしょう。②応募申請書用紙のご請求，その他のご連絡などは本協会あてにお願い致します。

II 本邦留学中の中国人研究者の研究助成のための「野上基金」設定にご支援のお願い

11月の臨時総会は，本誌3頁掲載の故野上茂吉郎先生ご遺族からのご寄付金百万円について，先生が1957年以来日中科学技術交流に粉骨砕身ご尽力あられたご業績を記念して，標記目的の基金設定を決めました。そして，同基金支援会の発起人を中心に，この基金拡充の募金が始まります。

近日中には，皆様のお手許に，野上先生の日中科学技術交流上のご業績，同基金設定の経緯などをお送り致します。そして，中国の科学技術人材の育成と日中両国民の友好を一層強化するため，ご支援，ご協力を切望いたします。

III 日中科学技術交流の新段階を迎えて……ご意見をどうぞ……

11月の本会臨時総会を経て，2年後の協会設立10周年へ向けての活動も大綱は打出されました。

中国の教育及び科学技術の体制改革も基本方針が決り，中国現代化の歩みも，経済開放体制の推進と共に新しい段階を迎えようとしています。

本誌12頁には，日中友好21世紀委員会の留学生，研修員等相互派遣の提案も転載しました。

日本は経済大国として，米欧との間に貿易や金融の自由化問題で大きく揺れています。モノとカネの自由化よりも人の自由化の遅れは甚しいと言われます。中国のみでなく発展途上国の科学技術人材育成は緊急課題です。世界的普遍性をもつ科学技術面の人の受入体制は（宿舎，日本語，予算，税制，その他の法制から国民意識まで），現状では困難が多く，留学生等の10万人受入れの首相口約も，現場の当事者は茫然とするばかりでしょう。

中国のみに限らず，科学技術国際交流の強化発展をめざすご意見・ご提案をお願いします。

IV 協会規約改正に伴う運営活性化にご協力を
去る11月の臨時総会は，協会規約を改正して，準会員制度を設け，活力ある若い科学技術者層を会員に迎え（会費年5千円）積極的な事業推進に道を拓くと共に，賛助会費の改訂（1口年額10万円）を行いました。このことは，現在の会員各位に臨時総会の報告としてお知らせ致しました。

本誌には，各所に協会の新しい動きが芽生えつつあることをご紹介してあります。これらの事業を積極的かつ活発に推進いたすためには，運営面の活力補強，財政面のご支援の強化が不可欠であります。

以上の次第で，新たに個人会員としてなるべく多数の方々を別紙の形式でお誘い願いたくご協力をお願い申し上げます。

なお，賛助会員のご勸奨は，参考までに企業名などお示し頂きますれば，協会から改めてお願い申し上げます。どうぞよろしくご高賜賜りたくお願い申し上げます。